

主 題：イエスの弟子として従うとは

聖書箇所：ヨハネの福音書 1章35－42節

今朝、見ていきたいのは、ヨハネの福音書1章のみことばです。きょうは、特に1章35－42節を中心に学んでいきたいと思えます。ただその前にいま一度考えてみてください。もしだれかが「イエス様の弟子、クリスチャンとして歩むとはどういうことでしょうか？」と尋ねたとしたら、皆さんはどのように答えるでしょうか？多くの方はご存じかもしれませんが、聖書の中で信仰生活というのは、競技やレースのようにたとえられることがあります。恵みによって救われた者たちは、みな同じ目標をみざして、同じ信仰のレースを走っているのです。

ヘブルの著者もこのように述べていました。ヘブル12：1「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪を捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」と。ヘブルの著者だけではありません。パウロ自身も、自分もそのレースの過程にいるのだとかつて告白していました。ピリピ3：13－14「：13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えるはしません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、：14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。」と記されています。ですから例外はひとりとしていませんでした。私たちもみな同じです。どの時代の人であろうと、どのような信仰者であろうと、「神の栄冠」を手にするという「目標をみざして一心に走っているのです」。当たり前のことですが、どのようなレースにも正しいスタートがあって、正しいゴールがあります。私たちは、自分たちが考える基準に基づいて、レースを走っているわけではありません。もし仮に定められたスタートから出発せずに定められたゴールにたどり着けなかったとしたらどうなるのでしょうか？たとえその人が、レースの途中のいかなる困難を乗り越えて、どんなに頑張ったとしても、スタートとゴールが間違っていれば何の意味もなしません。何よりやっとたどり着いた場所が違っていれば、それほど悲劇的なことはないのです。だからこそ正しいスタート地点から出発し、正しいゴール地点まで走り切ることが、すべての競技者にとって重要なことでした。

そして、信仰のレースにおいても同じことが言われるのです。私たちはヨハネ1：35－42を見ていきたいと思えます。そしてこの箇所には、イエス様と出会って救いへと導かれていく最初の人たちの姿が描かれています。ここに登場する人たちは、後に十二弟子として召される人たちです。しかし、十二弟子として召される前は、普通の人だった者たちが、イエス様の弟子として、イエス様に従う信仰者となっていくのです。そしてそんな彼らのうちに、きょう私たちはイエス様の弟子の三つの特徴を、実際にそのように歩んでいた弟子たちの姿から見て取ることができます。ですからぜひ、みことばを自分自身のこととして、改めて考えてみてください。イエス様の弟子となること、クリスチャンとして歩んで行くことがいったいどういう意味なのか、このみことばがそれぞれの信仰を吟味する助けになるだけでなく、自分自身の歩みの確信を増し加えるそんな励ましになることを心から祈っています。ではさっそくみことばを見たいと思えます。まずいつものようにみことばをお読みしますので、35－42節のところをよく見てください。

ヨハネ1：35－42

「：35 その翌日、またヨハネは、ふたりの弟子とともに立っていたが、：36 イエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の小羊」と言った。：37 ふたりの弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。：38 イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て、言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」彼

らは言った。「ラビ(訳して言えば、先生)。今どこにお泊まりですか。」:39 イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすればわかります。」そこで、彼らについて行って、イエスの泊まっておられる所を知った。そして、その日彼らはイエスといっしょにいた。時は第十時ごろであった。:40 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。:41 彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシヤ(訳して言えば、キリスト)に会った」と言った。:42 彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ(訳すとペテロ)と呼ぶことにします。」

○イエスの弟子として従うとは：三つの特徴

1. 従うこと 35-37節

イエスの弟子の一つ目の特徴は、従うことです。弟子としての歩みの最初の一步目は、主であるイエス様に従って行くことでした。みことばをもう一度よく見てください。35-37節にこのようにつづられています。「:35 その翌日、またヨハネは、ふたりの弟子とともに立っていたが、:36 イエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の小羊」と言った。:37 ふたりの弟子は、彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った。」と。この内容をしっかりと覚えるためにこれまでの流れを思い出してみてください。この場面が記される2日前の出来事を覚えていますか？バプテスマのヨハネは、ユダヤ人宗教家たちから遣わされた屈強な調査隊からいろいろな質問を受けていました。人々の注目を一身に集めて、毎日のように多くの人たちが彼のもとにバプテスマを受けに来ていたその現状を良く思っていなかった者たちは、調査隊を遣わして、厳しく彼を問い詰めていたのです。「あなたはキリストなのか？」、「あなたはエリヤなのか？」、「あの預言者なのか？」と。そして、極めつけは「あなたはいったいだれの何の権威によってバプテスマを授けているのですか？」と。

もしヨハネが人を恐れるような人物だったら、彼らの圧力に恐怖や不安を抱き、心折れて働きを途中で投げ出していたかもしれません。しかし、決して調査隊の圧力に屈することはありませんでした。むしろヨハネは、彼らの前で自分自身を弁護することはいっさいせず、人々の目をキリストに向け続けようとしていたのです。どのような時であろうとヨハネは、自分に与えられた主の証し人としての働きを忠実になそうとしていました。そして、そのようなことがあった次の日に、彼がしていたことは同じでした。人々の前で語り続けていたのです。ヨハネが人々の前で何を語っていたか1:29にこのように記されています。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と。ヨハネはこの方のすばらしさを心から信じていました。イエス・キリストこそ長い間人々が待ち望み続けてきた約束の救い主であること、この方こそ本来なら罪人に値した神の御怒り、さばきを代わりに受けて血を流される尊い小羊、神様のいけにえであることを知っていました。それ故にヨハネはそんな偉大なイエス様のことをだれに何と言われようといつも大胆に宣べ伝えていたのです。これが2日前と前日の出来事でした。

そして、私たちが今から見ていく35節から描かれていることが、その翌日の話になるのです。35節から読んでいくと、すぐに気づいたと思いますが、バプテスマのヨハネは何をしていましたか？バプテスマのヨハネは、同じメッセージを語っていましたよね。イエス様が歩いて行かれるのを目にした彼は、自分たちの弟子たちに向かって口にしていたのです。36節で「見よ、神の小羊」と。ヨハネは、どんな時も変わることなく主の証し人としての働きを忠実になそうとしていました。自分自身ではなく、キリストに人々のすべての焦点が当たるようにと常に願っていたのです。

さて、この背景を頭に入れた上で、ヨハネのふたりの弟子の応答を見てみましょう。36-37節に注目してください。「イエスが歩いて行かれるのを見て、「見よ、神の小羊」と言った。」、そのことばに対して、ふたりの弟子はいったいどのような行動をとっていたのでしょうか？ヨハネのことばを聞いた彼らは、「イエスについて行」きました。彼らはヨハネが願っていたとおりに、より偉大な主に目を向けて素直に従ったのです。

▶「ついて行った」(ギリ語:「ア」「一致/連結」+「ケレウソス」「道」=「アコルセオー」「だれかと同じ一
緒の「道」を歩むこと、同じ「道」を歩むだれかに従うこと、同じ「道」を歩むだれかの弟子となるこ
と)」

ここで鍵になるのが、用いられていた「ついて行った」ということばでした。この「ついて行った」と
いうことばですけれども、このことばにはもともとは「一致」とか「連結」を表す“ア”ということばと
「道」を表す“ケレウソス”という二つのことばが結びついてできた“アコルセオー”というギリシャ語
が使われています。そうすると「ついて行った」ということばを文字どおり訳すとしたら、これはだれか
と同じ一歩の「道」を歩むことという意味になります。そしてそれに加えるのであれば、同じ「道」を歩
むだれかに従うとか、同じ「道」を歩むだれかの弟子となるという意味をも含んでいます。この弟子に関
して、ひとりの注解者もこのように説明していました。「一世紀の弟子や見習い、門下生は、文字通り教
師の後を歩きながらその教えを学び、言葉と行動の両面から師の教えを吸収する者たちでした。」と。弟
子と聞いた時、皆さんがどのようなイメージを思い浮かべるかわかりませんが、弟子とは何か特別
な人たちのことを表しているのではありませんでした。弟子とは師である者と同じ「道」を歩んでい
く者たちのことを表していたのです。そして私たちに当てはめるのであれば、弟子とは師であるイエス様
に従って行く者、イエス様と同じ「道」を歩む者、それがまさに弟子と呼ばれる存在でした。私たちがイ
エス・キリストを信じ救われて信仰者として歩んでいるのであれば、私たちはみんな弟子です。イエスと
同じ「道」を歩もうとしているそんな弟子だということです。

ちなみに、私たちが使徒の働きを見ていく時に、キリストを信じる者たちやキリストに関する教えを
ある特別な表現で表すことがありました。私たちがキリストやクリスチャンについて考える時に、例え
ばキリスト者や弟子という表現を用いることがあります。しかし、使徒の働きの中では、それとは別に
ある表現が特別に用いられていました。使徒9:1-2「1 さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅か
しと殺害の意に燃えて、大祭司のところに行き、 2 ダマスコの諸会堂あての手紙を書いてくれるよう頼んだ。そ
れは、この道の者であれば男でも女でも、見つけ次第縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。」と記さ
れています。そして、使徒19:23にもこのように記されています。「そのころ、この道のことから、ただ
ならぬ騒動が持ち上がった。」と。もう少し先の使徒22:4にパウロが自分自身のことを告白して、この
ように書いていました。「私はこの道を迫害し、男も女も縛って牢に投じ、死にまでも至らせたのです。」と。イ
エス様に従って行く者たち、イエス様に関する教えを表す時に、どんな表現が使われていましたか？キ
リストを信じる者は「この道」を歩む者たちでした。「道」であると言われたイエス様の「道」を歩んで
いる者たちのことを、人々は「この道」の人たちと表していたのです。そして、イエス様と同じようにイ
エス様の「道」を歩んでいたからこそ当時の人たちはさまざまな迫害や試練を味わっていました。

ヨハネのふたりの弟子たちは、イエス様を目の当たりにしました。そして、ためらうことも疑いや質問
を口にすることもなく、イエス様に素直に従いました。バプテスマのヨハネを師として、このふたりの弟
子たちはともに過ごしていたのです。バプテスマのヨハネは彼らに何を告げていたと思いますか？間違
いなくヨハネはイエス様の偉大さやすばらしさについて、数え切れないくらい話し続けていたでしょう。
すべてのことを弟子たちが理解していたわけではありません。彼らは自分たちの愛している師、そのヨハ
ネからずっと聞き続けてきたイエス様が、実際に現われた時、彼らにはその方について行かないという
選択肢は微塵もなかったのです。すべてを知らなくても、イエス様のすごさを知った者たちは、ただつ
いて行こうとしました。自分たちのこととして考えてみてください。果たして私たちはイエス様に従う者
として今を歩んでいるのでしょうか？イエス様についての教えをこれまでいろいろなところで聞いてきた
でしょう。その教えを素直に信じ、イエス様の弟子として同じ「道」を歩んでいきたいと望んでい
るのでしょうか？いろいろな「道」があるのではありません。イエス様の弟子として、キリストをあか
しするクリスチャンとして歩みたいと願うのであれば、「道」は一つしかありません。そのイエス様と
同じ「道」を

従って行きたいと望んでいるでしょうか？それとも従う事にためらいや疑問を覚えているでしょうか？そして、ありとあらゆるものを犠牲にしてもイエス様に従うことを何よりの喜びとしているでしょうか？私たちがみことばを見ていく時、イエス様ご自身が自分の弟子として従っていく者たちに、その基準を明白に教えられている場面がたくさんありました。私たちは、イエス様の弟子として従っていくことがどういう意味なのかをイエス様ご自身が教えている場面をいろいろなところに見て取ることができるのです。イエス様はご自身の基準を持っていました。イエス様は、ご自分と同じ「道」を歩む者たちに、このようではなくてはならないとはっきり教えられていたのです。

例えば、ルカの福音書にこのようなことばが記されています。ルカ 14 : 25 - 33 「:25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。:26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。:28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。:29 基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、:30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった』と言うでしょう。:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。:32 もし見込みがなければ、敵はまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。:33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。」と。イエス様は自分自身の後に続いていた群衆に向かって、弟子となるためにともなう犠牲、費用というものをあらかじめ考えなくてはならないのだと、二つのたとえを用いて教えられました。そして、ここでの教えは非常にシンプルでした。当たり前聞こえるかもしれませんが、だれかが塔や何かの建物を建てようとする時、完成に必要な費用がいくらかかるかを何も考えずに建て始めて、途中で断念することになったら、どうでしょうか？ある王様が、自分の2倍の兵力の敵が向かって来ていることを知っていながら、何も考えずに敵に突撃していたら、どのように思いますか？それを私たちが見る時に、それは愚かだと思のです。建物を完成させようとするれば、大きな被害をこうむらないように、まずかかる費用や犠牲を最初にきちんと計算する必要があります。

そして、これはキリストの弟子にとっても同じことでした。イエス様自身が言われたのです。「私の弟子として私に従って来るのであれば、最初にまず費用を考えなさい」と。その費用は私たちの持っている願いや人生の計画かもしれません。キリストの弟子として歩んでいくことによって、自分の願いも計画もすべてを捨てないといけなかもしれません。その費用は私たちが持っている財産や持ち物かもしれません。キリストの弟子として歩むことによって、自分の財産や持ち物がなくなってしまうかもしれません。その費用は私たちの持っている人との関係や快適な生活かもしれません。キリストの弟子として歩むことによって、だれかとの関係が失われるかもしれません。また信仰ゆえにさまざまな困難に直面するかもしれません。キリストに従おうとする時、ありとあらゆるものを失うかもしれません。しかし、どれほどの費用がかかっても、キリストを愛するのなら、キリストの弟子は喜んで従っていこうとするのです。どのような場所や時や状況にあったとしても、イエスの弟子はすべてをささげて歩んでいこうとするのです。愛する皆さん、私も自分のこととして言い聞かせていますけれども、皆さんも同じです。弟子となるということ、これがどんな意味を持っているのかということを決して勘違いしてはいけません。

残念ながら、多くの人たちは別の基準を持って来ようとしています。ある人たちは自分が今持っている生活や人生にキリストを付け加えたら大丈夫だと言うかもしれません。ある人たちはキリストに従うことをできるだけ簡単に小さな犠牲だけで大丈夫なのだと訴えるかもしれません。しかしほかのだれでもないイエス様ご自身が言われるのです。「あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子

になることはできません。」と。もちろんこれは自分の持っている財産をすべて売り払わないとキリストの弟子になれないということではありません。イエス様が言わんとしていたことは、私たちが持っている物すべての所有者は、究極的には主であることを認めなくてはならないということです。以前の私たちの歩みは私たち自身が主人でした。私たちはすべて自分のものと思って歩み続けてきたのです。しかし、そんな私たちがキリストを主人として歩もうとするのであれば、キリストを自分の救い主として、主と信じて歩いていこうとするのであれば、キリストが主人になるのです。ふたりの主人はいません。自分が主人のままに続けるか、それともキリストが主人になるかのどちらしかありません。そしてキリストを主人として、キリストの弟子として歩むのであれば、私たちが今持っているものはすべて時間も財産もからだも心も私たちのいのちですら自分自身のもではなくなるということです。私たちにはもう何もないのです。しかし私たちには何もなくても一つだけ持っています。私たちには最高のキリストが与えられるということです。すべてを失ったとしても、私たちにはこの世界の創造主であり、救い主であり、神の小羊であるキリストを手にするができるということです。そのすばらしさを覚える時に、私たちはほかのものはいらないと思うのです。

イエス様の弟子として歩いていくことには多くの費用を伴います。十字架でご自分をささげくださった方と同じ「道」を歩いていこうとすれば、多くの犠牲が伴うということです。そもそも犠牲の「道」を歩まれたイエス様の「道」と一緒に歩いていこうとするのであれば、私たちは日々犠牲を払い続けることが求められるのです。『キリスト教の精髓』という本の中で、CSルイスもこのようなことばを残していました。「キリストは言います。『全てを私に差し出しなさい。あなたの時間やお金、働きの一部を求めているではありません。私はあなた自身を求めています。私は元のあなたを苦しめるために来たのではなく、それを殺すために来たのです。中途半端は何の意味もありません…元のあなた自身の全てを明け渡しなさい。あなたが純真だと思ふ欲望も、邪悪だと思ふ欲望も全てです。その代わりに私が新しい自分を与えます。いや実際、私は私自身を与えます。私の意志があなたの意志となるのです。』」と。いま一度考えてみてください。私たちの歩みは主のためであれば、喜んですべてをささげる、そんな犠牲を伴うものでしょうか？私たちを愛し、私たちのためにいのちをささげてくださいました主ご自身が、一部ではなくて全部を私たちに求めておられるのです。そして覚えておかないといけないのは「この道」以外に救いへと至る「道」はないということです。問われるのは、私たちがすべてを犠牲にするかどうかです。果たしてキリストを愛する弟子として私たちは喜んで従っているのでしょうか？

2. とどまること 38-39節

イエスの弟子にふさわしい、欠かせない二つ目の特徴はとどまることです。イエス様の弟子として従うことで足を踏み出した者はそれで終わりではありません。イエス様と一緒に歩み、イエス様と一緒にい続けようとするのです。38-39節にこのように記されていました。「:38 イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て、言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」彼らは言った。「ラビ(訳して言えば、先生)。今どこにお泊まりですか。」:39 イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすればわかります。」そこで、彼らについて行って、イエスの泊まっておられる所を知った。そして、その日彼らはイエスといっしょにいた。時は第十時ごろであった。」と。バプテスマのヨハネのもとを去ったふたりの弟子たちは、イエス様の後ろをついて行ったのです。自分たちの師が「いつも自分よりもはるかに偉大なお方なのだ。」と口にしていたイエス様を目の当たりにして、イエス様の後ろをついて行く中で、彼らは、どちらが先に話しかけようかと相談していたかもしれません。しかし、彼らがことばを発するより先に、イエス様が語られたのです。彼らの方を振り返ったイエス様は、一つの質問を投げかけていました。「あなたがたは何を求めているのですか。」と。これは非常に深い質問でした。イエス様は彼らのうちに何があるのかを知らなかったのではありません。人のうちをすべてご存じのイエス様は、彼らが心の中で何を思っているのかを口に出すことを求めておられました。そして、ご自分に従おうとする者の心を探られたのです。

当時、多くの人たちがいろいろな動機を心に秘めて、イエス様を追い求めるようになっていました。ある者たちは自分たちをローマの圧政から救い出してくれる救世主として、またある者たちはさまざまな奇跡を目の当たりにして、自分たちの病や肉体的な必要を満たしてくれる存在としてイエス様を求めていました。そして、ある者たちは興味本位で、群衆の一部としてイエス様を求めました。さまざまな間違った動機を抱いた者たちが数多くいたのです。これは今の時代でも何ら変わっていません。ある人たちは、健康であることを求めているかもしれません。困難や試練のない生活を求めているかもしれませんし、喜びや楽しみ、安心や快適さ、知識や成功、富や問題のない人間関係といったものを手にすることを願い、そしてそれらを与えてくれる存在として、イエス様を求めているかもしれません。私や皆さんもそれぞれ心にいろいろな望みや動機を持っています。イエス様に従おうとする弟子は、どのような動機を持っているかが大切です。どのような心の動機をイエス様は求められるのでしょうか？それはふたりの弟子の答えに明確に現れていました。「あなたがたは何を求めているのですか。」とイエス様に聞かれた彼らはこのように言いました。「ラビ(訳して言えば、先生)。今どこにお泊まりですか。」と。これを最初読んだ時、もしかしたら答えになっていないのではないですかと、イエス様の質問をうまく避けているのではないのですかと思った人がいるかもしれません。実はそうではありません。ふたりの弟子は、ただイエス様を心から求めていました。彼らは、イエス様と会話をして、イエス様を学び、もっと深く知るために、イエス様のいるところに自分たちもいたいと願っていました。何よりもイエス様と時間をともにしたいと願っていたからこそ、「イエス様どこに泊まっているのですか」と滞在している場所を尋ねたのです。そして、彼らは実際にイエス様が泊まっている所に行きました。そして、そこでイエス様と一緒にいたのです。

▶「いっしょにいた」

皆さんに覚えていてほしいことばが一つあります。それは、39節で「その日彼らはイエスといっしょにいた。」と訳されていることばです。この「いっしょにいた」ということばは、ヨハネの福音書を通して40回も登場します。ですから私たちはこれから何度も見ることになります。そしてこの「いっしょにいた」ということばには、もともと何かがある場に居座ることやとどまり続けること、また、何かがあるに密接に結びついているといった意味を表します。そして、このことばから、イエス様の弟子というのは一時的なものではないということがわかります。

イエス様に従うとは、「私はイエス様に従って行きます」という一回の宣言の話ではありません。イエス様の弟子とは、継続的で何よりも個人的な関係でした。愛するイエス様とともにずっと続けようとする、愛するイエス様から決して離れないでその場にとどまり続けようとする、それがイエス様の弟子の特徴なのです。そのことを一番わかりやすく見て取れるの箇所は、ヨハネ15：1-8に「：1 わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。：2 わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさい。：3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。：4 わたしにとどまりなさい。」、この「とどまりなさい」というのが、先ほど見た「いっしょにいた」と同じことばです。「わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。：5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。：6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。：7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。：8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになるのです。」と記されています。ここには、「とどまる」ということばが何度も繰り返されていました。ぶどうの木と枝を考えた時に、ぶどうの木の枝が枯れ

ずに成長したいと望むのであれば、何が必要になるでしょうか？枝が実を实らせるためには何が必要になるでしょうか？答えはシンプルでした。木に結びついている必要があるのです。枝は大きかろうが小さかろうがどのような枝であろうとそれ自体では成長することも、実を結ぶことも決してできません。枝が活着しているためには、いのちの源となる木と結びついて、離れないことがすべてです。

イエス様は、そのたとえを持ち出して、ご自分と弟子たちの関係を表していました。枝がぶどうの木から離れては生きて行くことができないように、弟子たちはキリストといつも親密な関係にあり、何があらうとこの方に結びついていないと生きていけないということです。枝であるキリストの弟子にとって何より重要なことは、いのちの源であるキリストを愛し、キリストに従い、キリストのことばにとどまり続けることでした。私たちが、イエスの弟子として歩んでいこうとするのであれば、従うだけではなく、とどまり続けようとするのです。果たして私たちは、イエス様のうちにとどまり続けているのでしょうか？過去に、「イエス様に従って行きます」と告白しました。そして、それを否定はしません。しかし、問われるのはイエス様に従い続けているかということです。イエス様に従い続けているのであれば、イエス様のみことばと喜んで時間を取っているのでしょうか？イエス様を愛しているのであれば、その方の戒めを進んで守ろうとしているのでしょうか？木であるイエス様にとどまる生き方とは、そのような生き方でした。時に私たちは木であるイエス様にとどまっていなければならないと言われていても、枝である私たちに何らかの力があるかのように、枝の勝手な考えや思い、力で生きていくことができるかのように歩んでいこうとすることがあります。そして、その時に私たちが問うべきことは何だと思えますか？それは、私たちはいつもイエス様が問われていたことを自分自身に問い続けることが必要になるのです。問われるのは、「私たちが本当にイエス様を求めているのか」ということです。そして、本当に求めているのであれば、イエス様とともにいることを望み続けているのであれば、イエス様にとどまり続けようとしします。もしそれ以外の何かを求めているのであれば、私たちはイエス様を求めようとはしていません。もしそれに気づいたのであれば、イエス様に戻ってくることです。弟子たちは、素晴らしいイエス様とともにいることをいつも願っていました。彼らは、愛するイエス様のもとにとどまり続けることに、最高の満足を見出していたのです。イエス様にとどまり続けることでその満足を、慰めや喜びを私たちは見出すことができます。果たして、私たちはキリストを愛する弟子として喜んでとどまり続けて歩んでいるのでしょうか？

3. 宣べ伝えること 40-42節

イエス様の弟子の三つ目の特徴は、宣べ伝えることです。イエス様の弟子というのは、自分ひとりだけが従って、とどまるものではありません。周りの者に対しても、自分の愛する偉大なイエス様の姿やすごさを分かち合おうとするのです。40-42節にこのように書かれていました。「:40 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。:41 彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシヤ(訳して言えば、キリスト)に会った」と言った。:42 彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ(訳すとペテロ)と呼ぶことにします。」と。ここで具体的に、イエス様に従ったバプテスマのヨハネの弟子のひとり、アンデレの名前が挙げられていました。ちなみに、もうひとりの弟子の名前は、いっさい触れられていませんでした。そして、それゆえに多くの人たちは、もうひとりの弟子がヨハネの福音書の中で絶対に名前が出てこない人物、著者のヨハネではないかと考えているのです。ですから、アンデレと著者のヨハネが最初にイエス様のところに行ったと多くの人たちは考えています。いずれにしろ弟子のひとりアンデレの人生は大きく変えられました。イエス様と出会って、個人的に時間をともにした彼は、当然多くのことを学んだことでしょう。すべてのことを知ったわけではありません。しかし、自分のつき従っている主が、長い間人々が待ち望んできたメシヤ、キリストであることに彼は気づきました。彼は素晴らしい真理を自分のこととして少し理解したのです。間違いなくアンデレの心は、喜び

に満ちあふれていたでしょう。そして、彼はためらうことなく自分の兄弟ペテロにその真理を伝えたのです。イエス様を知って、一日経つか経たないかのうちにアンデレは主人のすばらしさを知らせる足として働きました。イエス様に従う弟子として、ほかの人にも同じようにこの主に従うようにと熱心に求めたのです。

果たして私たちはどうでしょう？私たちはイエス様を人々に宣べ伝えることを自分にとって欠かせない務めだと信じているのでしょうか？私たちは、このようにして一緒にイエス様に関する説教を聞き、みことばを学ぶこともあります。またこの方に賛美をささげ、周りの人の救いを祈ることも私たちにとってすべてが必要です。しかし、同時によい知らせを宣べ伝える器として、人々に救い主キリストのもとへおいでとあかしする者として歩んでいくことを私たちは喜びとしているのでしょうか？ローマ10：12-15に「：12 ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。：13 「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。：14 しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。：15 遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」と書かれています。

改めて考えてみてください。確かにアンデレの兄弟ペテロは、私たちだれもが知っている信仰者のひとりです。十二弟子の中においても彼は大いに用いられました。彼は、人々の間で大胆に福音を語り、後には聖書に含まれる手紙さえも記しました。失敗することもたくさんありましたが、最後まで忠実に歩み続けた彼は、十字架に逆さまにつけられて殉教したのです。教会の歴史においてペテロは、重要な土台を担った人物だったと言っても過言ではないでしょう。しかし、そんな立派な人物も彼自身が始まりではありませんでした。彼に最初に宣べ伝えた、愛にあふれた者がいたのです。その働きがなければ何も始まりませんでした。だからこそ私たちも同じように確信を持って歩むことができます。神様は、だれにも理解や想像ができない方法で思いのままに私たち証し人を用いることができるのです。

実際に、私たちが救いへと導かれたその時も、だれかがイエス様について私たちに語ってくれました。同じ神様は今も変わらずに働いています。だからこそ私たちの責任は、偉大なイエス様を人々に伝えていくことです。唯一救いをもたらすことのできるキリストに従うようにと訴える証し人として、私たちは今も遣わされているのです。もしこの中にまだイエス・キリストを知らないという方がいるのであれば、イエス・キリストを個人的な救い主として知らないという方がいるのであれば、ぜひきょうの内容をよく考えてください。そして、自分自身のために生きていく歩みを今すぐやめてください。主の前に心から悔い改めて、自分のすべてをささげてこの方を受け入れてください。あなたにとって最も必要な救いを与えることのできるお方、それはただイエス・キリストだけです。ですからどうかこの主とともに歩むことのできるその幸いや喜びと満足をきょう知って帰ってください。

また、もうイエス様の弟子として歩んでいる兄弟姉妹の皆さん、きょう見てきた内容は確かに厳しいものでした。日々自分を捨ててキリストを愛して生きて行くことは、多くの犠牲が伴うでしょう。私たちがキリストにすべてをゆだねて歩んで行く時、そこには困難や戦いも存在しているでしょう。でもそんな時こそ思い出し続けてください。私たちのために犠牲を払ってくださった方がいるということです。そして、十字架でご自分のいのちをささげてくださった方と同じ「道」を歩んで行こうとするのであれば、当然、そこには多くの犠牲が伴うのです。その「道」は、私たちが嫌々苦痛にあふれて歩む「道」ではありません。私たちのために尊いいのちを捨ててくださった愛する主、神の小羊とともに歩むことができる最高の「道」です。だからこそ、だれがともにいるのかを忘れないことです。主の弟子として何よりもまずこの方に従い、この方のうちにとどまり続け、そしてこの方のすばらしさを宣べ伝え続けていくことが、イエス様の定められていた弟子の基準でした。これ以外の「道」はありません。だからこそ自分自

身のこととしてよく考えてください。そして主の弟子として地上の残された時間を主の栄光のためにもに歩み続けていきましょう。